

〔学位論文要旨〕 2015年度白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程
社会的笑いの発達：笑いの攻撃性の観点から

伊藤 理絵

第Ⅰ部では、第1章「笑いの理論：笑いはどのように語られてきたか」において人間の笑いに関する理論の概略を述べ、優越感情理論だけでなく、不適合理論、覚醒理論、放出理論からも笑いの攻撃性について考えた。コミュニケーションとしての笑い（社会的な笑い）を考える際には、脳神経科学や生理学等を含む学際的なアプローチと、親和／攻撃および愉快／不安のような笑いの相反する二つの性質を包含した議論が必要であることを述べた。第2章「子ども期における笑いの発達」では、子ども期の笑いの発達について乳幼児期を中心にこれまでの研究をまとめた。乳児期の笑いは、親和的笑いとして発達するが、幼児期になると笑いを介したやり取りが常に心地良いものではないことに気付くようになり、この気付きが笑いには親和性だけでなく攻撃性もあることを知る土台となると考えた。やがて、「嘲笑」のような攻撃を意図した笑いも見せるようになり、5歳児（年長児）の終わり頃になると自ら笑いをコントロールする場面が見られることから、幼児期は、笑いのもつ親和性と攻撃性という相反する二つの性質に気づく最初の発達段階にあることを述べた。また、社会的笑いの構成要素として「生物学的要因」「社会文化的要因」「認知・感情発達の要因」という3つを仮定し、これらの要因が互いに影響を受けて発達することで、他者に対する親和的笑いだけでなく、他者を拒絶したり排除したりするための攻撃的笑いの表出に至ることを考察した。

第Ⅱ部では幼児が表出する社会的笑いについて、5つの観察研究を取り上げた。第3章「幼児期に見られる笑い」では、幼児期に見られる社会的笑いの実態について観察した結果を示した（観察1～2）。笑いが生じるための「刺激要素」と他者との「関係性」から幼児に見られる笑い全般を明らかにし、「関係性」は、「親和的・受容的關係」「非親和的・非受容的關係」「孤立的關係」の3つに分類でき、「刺激要素」は「感覚・運動刺激」「言語・認知刺激」「感覚運動・言語認知刺激」の3つに分類された。幼児が見せる笑いは、他者との親和的・受容的關係の下での笑いが9割以上を占めており、特に、言語・認知刺激に対して笑いを示していたことから、幼児は、笑うことで他者とのコミュニケーションにおいて、親しみを表すことが多いことが明らかになった。第4章「幼児期に見られる攻撃的笑い」では、幼児の攻撃行動に伴う笑い（攻撃的笑い）について考察した（観察3～4）。幼児の観察を通して少ないながらも攻撃行動に伴う笑いが見られ、幼児が攻撃的笑いを表出する際は、無視等の関係性攻撃に伴って笑いを示すことが

多かった。また、仲間とともに攻撃的笑いを表出する場面では、攻撃的笑いを共有する仲間同士にとっては親和的な笑いであるが、笑いの対象となった相手にとっては攻撃的な笑いであるという、一つの笑いが二重の意味をもっていた。幼児の攻撃的笑いは、頻度の点でも表出形態の点でも“見えにくい”性質をもっており、この“見えにくさ”こそが幼児の笑いを両面（親和性・攻撃性）から捉える重要性を示していることを述べた。第5章「大人に受け入れられない幼児の笑い」では、保育の一斉活動場面という、大人による規制が比較的強いと思われる集団活動場面を取り上げ、その中で幼児が見せた大人に受け入れられない笑いについて考察した（観察5）。大人が幼児の笑いを伴う行動を受容しなかったときに、幼児がどのような反応を見せるのかを分析した結果、大人の介入後に見られた全事例のうち約6割が、幼児の笑いが消失する事例であった。保育士等の大人は状況に応じて守るべき行動の基準を変えており、幼児の笑いを伴う行動を不適切であると判断した大人は、笑いの不適切さではなく、笑いが付随する行動の不適切さに焦点を当て、婉曲的に指摘する可能性が示唆された。

第Ⅲ部では、幼児を対象に実施した実験と、幼児期以降、笑いが常に自他にとって良い影響をもたらすわけではないことという経験を積み重ねてきた大学生を対象に行った質問紙調査の結果をまとめた。第6章「幼児は笑いの不愉快さを説明できるのか」では、笑いの理解課題として、主人公が自分の失敗を他児に笑われ泣いてしまうというストーリーの紙芝居を作成し、笑われる不愉快さを幼児は理解しているのかを実験によって検討し、感情理解課題、心の理論課題および言語能力との関連も調べた。その結果、失敗を笑われた後の結果を予測することと、結果を笑われたことから説明することは、生活年齢および感情理解と正の相関関係にあった。また生活年齢と語彙年齢を統制すると、心の理論は結果の予測と関連があり、感情理解は結果を説明することと関連がみられた。第7章「笑いの不愉快さの経験と「笑い」のイメージ」では、大学生を対象に「笑い」という言葉から思い浮かべるイメージをカテゴリー化した。「嘲笑」のように他者に与える不愉快さをイメージさせる言葉も挙げられていたのはいたものの、「笑い」から思い浮かべる言葉については、「楽しい」「幸福」などのポジティブな語が上位になっていた。次に、笑いの不愉快さの経験の有無を尋ねたところ、6割弱が不快な笑いの経験をしており、経験の時期は、思春期にあたる中学生から高校生と答える割合が5割以上を占めていた。笑いの不愉快さの経験の有無にかかわらず、「笑い」に対してはポジティブなイメージが示され、不快な笑いの経験が「ある」と答える者は、不快な笑いの経験が「ない」と答える者よりも「コミュニケーション」や「会話」を挙げる者が多く、不快な笑いを経験していることを自覚しているからこそ、コミュニケーションにおける笑いを重要視していることが示唆された。第8章「不愉快な笑いは不愉快か：笑いの攻撃性のポジティブな働き」では、大学生を対象に、社会風刺のような攻撃的ユーモア刺激（4コマ漫画）を笑ったり、おもしろいと思ったりすることについて質問紙調査を行った。攻

攻撃的ユーモア刺激を「おもしろい」「笑える」とするユーモア高評価群は、ユーモア低評価群よりもコミュニケーションにおいて笑いを必要だと思いう傾向がみられた。従来、攻撃的笑いや攻撃的ユーモアは、主に優越感情理論で解釈されてきたが、ユーモア経験に至るための攻撃的ユーモアには、不適合理論における感覚的不適合と論理的に適合とともに、日常生活のコミュニケーションにおいて笑いを重視していることも関連していることが示唆されたことは、笑いの攻撃性をポジティブに捉えることと、日常的な笑いに対する態度に何らかの関連があることが示された。第9章「結論：笑いの攻撃性がもたらすもの」では、本論文の総括と成果をまとめた。周囲の大人が、子どもの笑いについてポジティブな側面からのみ捉えようとする、子どもが笑いに対して感じる不愉快さを理解できないことがあり、社会的笑いの発達を攻撃性の観点から明らかにすることは、子どもの言動を適切に解釈する視点にもなることを述べた。さらに、人から笑われることへの恐れ (the fear being laughed at) として「笑われ恐怖症 (gelotophobia)」に関する研究が、特に海外で多くなされていることに触れ、笑いに対する感受性や表出性の個人差についても、今後検討して必要があることを述べた。